派遣研究者：金子　祐樹

相手先機関：ソウル市立大学校

専 門 分 野：17 世紀朝鮮の伝統文化

テ　ー　マ　「17 世紀初頭の朝鮮における道徳観念の諸相

—共時的考察を中心に」

月度報告書（2012 年 3 月－2013 年 12 月）

「月度活動報告書」（2012 年 03 月度）..... 1
「月度活動報告書」（2012 年 04 月度）..... 2
「月度活動報告書」（2012 年 05 月度）..... 3
「月度活動報告書」（2012 年 06 月度）..... 4
「月度活動報告書」（2012 年 07 月度）..... 5
「月度活動報告書」（2012 年 08 月度）..... 6
「月度活動報告書」（2012 年 09 月度）..... 7
「月度活動報告書」（2012 年 10 月度）..... 8
「月度活動報告書」（2012 年 11 月度）..... 9
「月度活動報告書」（2012 年 12 月度）..... 10
「月度活動報告書」（2013 年 01 月度）..... 11
「月次活動報告書」（2013 年 02 月度）..... 12
「月度活動報告書」（2013 年 03 月度）..... 13
「月度活動報告書」（2013 年 04 月度）..... 14
「月度活動報告書」（2013 年 05 月度）..... 15
「月度活動報告書」（2013 年 06 月度）..... 16
「月度活動報告書」（2013 年 07 月度）..... 17
「月度活動報告書」（2013 年 08 月度）..... 18
「月度活動報告書」（2013 年 09 月度）..... 19
「月度活動報告書」（2013 年 10 月度）..... 21
「月度活動報告書」（2013 年 11 月度）..... 23
「月度活動報告書」（2013 年 12 月度）..... 25

「月度活動報告書」（2012 年 03 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

日本よりも年度の始まりが 1 ヶ月早い韓国の年次に合わせ、3 月から現地滞在を開始した。「頭脳循環派遣」の開始月ということもあり、今回の滞在期間中の主たる活動、すなわち①研究および生活の両面で必要となる長期的基盤の構築、②資料調査作業の開始、のうち、前者にかける時間がいきおい多くなった感がある。

前者については、生活や研究の準備のほか、受入研究者として御指導やお世話を賜ることとなる先生方へのご挨拶も含まれる。 JANG, Won-ho(張元皓)教授・NAM Gi-Beom(南基範)教授(兼、都市科学研究院都市社会研究センター長)をはじめとする都市社会学科の先生方やKIM, Shin-doh(金信道)院長など都市科学研究院の先生方にはこの度の在韓研究に際し現在もお手間を頂いている。

ソウル市立大学校は、ソウルの中でも都心に比較的近い地域に位置する。また、仁川大学校は国家への移管が早晩行われる予定であるため、韓国で事実上唯一の公立大学校と言っても過言ではない。大阪市立大学と同じく都市研究を標榜しており、派遣者が身を置く都市科学研究院は 1998 年に開設された。同大には他にもソウル学研究所、都市人文学研究所、都市防災安全研究所、ソウルグリーン環境支援センターといった都市研究に関する付属研究機関が設けられており、同大の都市研究に対する姿勢が理解できる。

都市科学研究院は、14 の傘下研究所により構成されている。その一つである都市社会研究センターは社会学・人類学・地理学や文化学といった側面から都市研究を行う。その性質上、同大都市社会学科とのつながりが強く、そのおかげで同学科の大学院生との面識も持つことができた。

なお、資料調査については、まず候補として考えていたソウル大学校奎章閣・高麗大学校漢籍室・延世大学校国学資料室の三つについて所蔵や閲覧規定などを確認した。どの機関も現在はインターネットを介しての申請が主流となっており、この点は便利になっている。一方で、高麗大漢籍室については規定集でなく公知事項の一記事として閲覧可能日・方法を制限する旨の記事があった。資料調査そのものは次月に行うこととし、今月はこうした規定の確認や申請方法、また蔵書検索による所蔵資料の確認など、予備作業に従事した。

「月度活動報告書」（2012 年 04 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

当月は、一時帰国もあったためか、存外に慌しかったように思える。

資料調査については、先月の事前調査に沿ってソウル大学校奎章閣、延世大学校国学資料室、高麗大学校漢籍室の三機関へ訪問、実施した。調査対象は宋徵殷『国朝名臣言行録』前集のうち完本と思われるもの。他にも同書完本には後集・続集・外集・別集が存在することや、零本として現存するものも別に保管されていることから、今後も引き続き調査する予定である。

また、こうしてソウルに研究拠点を移したことで、韓国思想史学会の月例会や、高麗大民族文化研究院 HK 韓国文化研究団・知識生産体系研究チームのシンポジウム（以下、高麗大 HK シンポジウム）といった現地学会に空路を介することなく参加できるようになったのはありがたい。なお、HK とは Humanity Korea（人文韓国）支援事業の略称。人文学を対象とした国家的研究支援プロジェクトである。

韓国思想史学会では、今年度に博士課程へ上がった方を含む若手研究者 3 名からの発表があった。一方、高麗大 HK シンポジウムは、「朝鮮時代における知識・知識人の再生産体系―17～18 世紀の安東金氏を中心に―」という主題の下、ソウル内外の研究者により発表・総合討論が行われた。前者において自身と同様の若手研究者の、後者で朝鮮後期の士大夫研究の、最新動向にそれぞれ接することができ、いずれも学ぶところがあった。

その他、月末に雲峴宮（Woon-hyeon Goon）で「高宗・明成皇后嘉礼」再現行事があったため、足を運んだ。朝鮮王朝末葉の王、高宗とその王妃、閔氏（死後、明成皇后として追封される）の婚姻儀礼を再現したものとして行われており、ソウル市民はもちろん観光客も観覧が可能である。そのため、少なからぬ観覧客が詰め掛けていた。翌月行われる宗廟大祭もそうであるが、こうした「伝統」を謳う行事・催しの情報は、visit seoul(ソウル観光公社、http://welcome.visitseoul.net/jap/index.jsp) や visit korea(韓国観光公社、http://japanese.visitkorea.or.kr/jpn/index.kto)といった公社ホームページの広報を通じて外国人旅行者が入手しやすいようにされている。

「月度活動報告書」（2012 年 05 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

今年の 5 月には、韓国を賑わす要因が二つある。一つは大学祭シーズンであること。恐らく韓国の大学がどこも賑わっていたことと思う。ここソウル市立大学（以下、ソウル市大）もそうであったが、他にも他にも高麗大、誠信女子大、漢陽大、慶熙大、韓国外大、世宗大、などなど近隣の大学で催されていたようである。4 月の中間試験（完全セメスター制により授業が学期毎で完結するため中間・期末試験がある ）を終えた学生にとってはまさにストレス発散の月と言えよう。もう一つは釈迦生誕日。陰暦の 4 月 8 日がこれに当たり、今年は 5 月 28 日であった。そのため、ソウルや釜山などでは燃灯祝祭という名のイベントが催されていた。韓国全国の仏寺でも法要が行われたそうである。

さて、今月は先月に続く資料調査や、ソウル市大と北海道大学との合同学術セミナーを含む学会・シンポジウムで勉強させて頂いた。今回はその一つと、加えて「現地踏査」というほどの規模ではないけれども実見した史跡の紹介とを主軸に報告したい。

参加させて頂いた学会・シンポジウムのうち、ここでは東アジア文化交渉学会 2012 年大会「災害と東アジア」を取り上げる。全部で 28 ものパネルがあり、それぞれのテーマは儒教・キリスト教・ミステリー文学・日本語教育学など実に様々であった。うち、壬辰倭乱、日本で言う文禄・慶長の役は連続する二つのセッション「東アジア世界と壬辰倭乱」(1)および(2)で取り上げられていた。(1)は韓国人研究者による発表、(2)は中国人研究者による発表で構成されている。軍糧問題・戦術・戦力・軍制に焦点を当てた内容が共通して発表され、総合討論を含めると合計 200 分にわたった。終えてみると日本史側の観点が含まれた討論を聞いてみたくなった、というのが日本人にして韓国伝統文化を学ぶ報告者に残った素朴な所感である。

また、現地踏査のまねごとで、議政府市にある鄭文孚将軍墓へ足を運んだ。鄭文孚(1565-1624)、字は子虚、号は農圃。諡号は忠毅公である。義兵将の一人として知られており、咸鏡道吉州で兵を起こし、また戦乱に乗じて叛乱を起こした者を処刑し、日本軍を退陣させた。彼の墓を含む敷地には、祠堂や子孫の住まう家舎もあり、祠堂の敷地に入る門には「復地門」、祠堂自体には「忠徳祠」という名が付けられている。その功績に由来するものであることは言うまでもない。子孫の方に伺ったお話によると、秋には彼に奉ずる祭祀が行われるとのことであった。ちなみに、将軍墓のある議政府市はソウルの北方にあるベッドタウンであるが、国防上、在韓米軍の基地がある。同市が韓国で親しまれるプデ（部隊）チゲの本場と言われる所以であるが、そのプデチゲ通りもある同市中心部から将軍墓まではバスで 1 時間ほどかかった。其処で撮影した 1 枚を載せて本報告を終えたい。末筆ながら、お話をお聞かせ下さった子孫の男性に感謝申し上げる。

「月度活動報告書」（2012 年 06 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

民族文学史研究所という、私設研究所を有する学術団体（以下、同所と略称する）がある。その中の分科会の一つ「古典小説史班」の読書会にこのたび参加させて頂いた。

韓国古典における「民族史」の解明を志向する古典小説史班が催しているこの読書会は、目下、いわゆるナショナリズムに関する先行研究書について書評を行いつつ、それを叩き台として「民族」に関する議論を展開する形式で進められている。今回取り上げられたのは、ベネディクト・アンダーソン著、ユン・ヒョンスク訳[2003]『想像の共同体—民族主義の起源と伝播についての省察（韓国語表記：상상의 공동체：민족주의의 기원과 전파에 대한 성찰）』（ナナム出版）であった。言うまでもなく本書は、Benedict Anderson *"Imagined Community: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism"*の韓国語訳本であり、日本では白石隆・白石さや両氏[2007]の訳による『定本　想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（書籍工房早山）が簡便に入手されよう。

議論は 2 時間ほど行われ、原著副題にも見られる"Nationalism"を「民族主義」と一義的に解釈すること自体も俎上にあげられていた。中華思想など関連事項も取り上げつつ、次回以降も引き続きこうした議論が積み重ねられることとなろう。なお、ナショナリズムの訳語については、韓国でも訳書によって白石両氏訳と同じく音写するものもある。決して韓国全体で一義的に理解されているわけでないので、念のため付記する。（例えば George L. Mosse *"Nationalism and Sexuality"*の西江女性文学研究会訳『내셔널리즘과 섹슈얼리티（ナショナリズムとセクシャリティ）』（ソミョン出版）など）

ところで、遅くともこの滞在以来、国の呼称として「韓国(한국)」でなく「大韓民国(대한민국)」が日常の往来で以前よりも聞かれるようになった。テレビを見れば「国への愛(나라 사랑)」を謳うコマーシャルがよく目に入る。1988 年のソウル五輪、2002 年の日本とのワールドカップ共催、2010 年の G20 ソウル首脳会談と、世界規模のイベントの開催を通じてその存在が世界にアピールされてきた韓国。一方で、今なお移民や海外居住を志向する風潮もあり、この 4 ヶ月で二、三の方から御子女の日本含む海外居住について嬉しそうに話されるのを聞かせて頂くこともあった。また、死六臣論争(1977 年)のように史上の人物に対する前近代の忠臣評価の反映としての史跡にすら影響を及ぼした事例もある。「くに(나라：ナラ)」や「民族」をめぐるこうした諸相に、オーバーな表現になるけれども、韓国における古典研究・歴史研究の意味を考えさせられてしまう。最後に、添付の画像として 7 人の忠臣の神位を奉ずる死六臣墓の祠堂を載せ、今月の報告を終える。

「月度活動報告書」（2012 年 07 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

慶熙大学校の松本眞輔助教授からお知らせ頂き、国立中央図書館で行われた日韓古典籍研究交流会（韓国語表記「한일고전적연구교류회」、以下では同会と略称する）というシンポジウムへ参席させて頂いた。今回で 3 度目を迎えた同会は日本の国文学研究資料館（国文研）と韓国の国立中央図書館とで共催されており、日本側研究者による中央図書館所蔵の日本古典籍調査の報告と中央図書館研究者による韓国印刷出版史に関する発表などが行われた。

韓国における日本の古典籍はソウル大学校閏章閣などいくつかの機関に少なからぬ量が蔵書されていると聞く。国立中央図書館所蔵のものもその一部である。インターネットの記事からの引用となる点は御容赦頂きたいが、韓国において 17807 点の日本古典籍が蔵書されているとの調査報告も存在する(松原孝俊研究代表「東アジアにおける日本語資料所在と現状とに関する調査」、科学研究費補助金研究課題(基盤研究(B)、課題番号: 17401011)、2005～2007 年度、http://kaken.nii.ac.jp/d/p/17401011.ja.html)。日本における朝鮮古典籍と同様、確認された蔵書の所在をその後どうするかといった問題はあるけれども、同会の調査報告のように蔵書それ自体の資料的価値を検証することは、貴重な典籍を向後も逸失・損傷することなく次代へ伝えるのに資するものと考えられる。

また、文禄・慶長の役（韓国では壬辰・丁酉倭乱）で活躍した李舜臣将軍を祀る顕忠祠への現地踏査を行うなどした。この顕忠祠は故朴正熙(前)大統領の聖域化事業でも対象となっていたが、2008 年から 2011 年までの顕忠祠遺跡整備事業で更に整備された史跡である。昨年 4 月末に開館したばかりの忠武公李舜臣記念館も敷地内に存在する。また、ここから少し離れている李舜臣将軍墓へも足を伸ばした。いずれの施設も文化財庁とその下部組織である顕忠祠管理所が運営・管理を行っている。

古典籍であれ史跡であれその管理や保存は個人で行うのに限界がある。史跡の実見が文献の内容を理解するのに助けとなることは十分にありえよう。韓国の古典籍が大小さまざまの戦乱により典籍が消え去ったとされる（安春根著、文燻珠訳[2006]『図説　韓国の古書』、日本エディターズスクール出版部、p29）状況なのであれば、史跡やその保護の重要性がいや増すことは言うまでも無い。古典籍・史跡など文化財への公的機関による保護事業が進められている一方、「死六臣論争」や上述の「聖域化事業」のようにいわば史跡への干渉とも解釈され得るケースもある。この並存が現代の韓国という国家が持つ歴史観を垣間見せてくれる、と言えば言い過ぎであろうか。

「月度活動報告書」（2012 年 08 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

8 月は多少の体調不良に見舞われて全体的な調子を崩してしまうこともあったが、気を取り直して金堉の著した人物伝について、『海東名臣録』から調査に着手した。

『海東名臣録』には新羅 2 名・高麗 3 名を含む 300 名分以上の人物伝が収められており、文官や武官のほか、王族の伝も見受けられる。9 巻 9 冊。出版物としては朝鮮古書刊行会の活字本(1912 年刊)と韓国自由教育協会による編訳本(1973 年刊)の 2 種がある。今回の調査ではソウル大学校奎章閣所蔵のもののうち、後者が定本にしたとするものを対象とした。

金堉(KIM, Yook)は 1580 年に出生、1658 年に没した、朝鮮士大夫である。したがって、王代でいえば宣祖・光海君・仁祖・孝宗の四代にわたる人生を過ごしたことになる。また、朝鮮の役／壬辰戦争（文禄慶長の役／壬辰・丁酉倭乱）を青少年期に経験し、その戦禍からの復興の開始期を今で言う働き盛りの頃に過ごした人物でもある。ただし、1611 年に光海君と衝突したことで一度官途を離れ、1623 年の仁祖反正を経て再び官途に就くまでの間は隠棲していた。その後、1627 年・1636 年のホンタイジによる朝鮮侵攻も経験している。

金堉には他にも『類苑叢寶』といった類書、地誌である『松都誌』を著したり、農書『救荒撮要』や医書『辟瘟方』の刊行を上奏したりするなど、その視野の広さをうかがわせるものがある。また、人物伝集としては己卯士禍の人物伝などを収めた『己卯諸賢録』も存在することから、『海東名臣伝』と通覧することで一つの連続した何かが見えてくるのではないかと想像をたくましくしている。

「月度活動報告書」（2012 年 09 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

16 世紀終盤に生まれ 17 世紀半ばに没した朝鮮士大夫の金堉(KIM, Yook)が、類書・医書・地誌・農書など多様な種類の書物の著述または編纂を行っていた人物であることは、前月の報告でご紹介したとおりである。この金堉の手による人物伝は管見の限り、『己卯録』・『海東名臣伝』・『国朝名臣録』の三種が現存する。著述時期の早いものから簡単に紹介すると次のとおり。

『己卯録』は己卯士禍で失脚させられた趙光祖ら 8 人を冒頭に庶民らしい事例を含む 200 強の事例を載せる。『海東名臣伝』は新羅・高麗の時代から 17 世紀半ば頃までの期間の人物を王族も含めて収録。『国朝名臣録』は朝鮮時代の事例のみである。

うち、韓国所在の『海東名臣録』から、韓国自由教育協会による編訳本の底本となったソウル大学校奎章閣所蔵本、高麗大学校漢籍室所蔵の木版本二種、そして朝鮮図書刊行会出版の活字本について調査を行ったところ、全 9 巻揃っている奎章閣本に対し、漢籍室本は晩松文庫本が巻 3・5・7・8・9 を、六堂文庫本は巻 3・5・6・8・9 を備えるけれども他巻を欠いていた。両者とも欠落しているのが 1・2・4 巻、逆に現存するのが 3・5・8・9 巻である。また、 朝鮮図書刊行会本は全 9 巻分を収録・活字化しているものの、若干ながら記事の欠落があったり、あるいは順番が入れ替わっていたりするなどの異同が見られた。単なる誤りか、でなければ奎章閣本とは異なるものを底本とした可能性もある。国立中央図書館や延世大学校国学資料室にも蔵書があるとのことなので、これらとの対比も行う予定である。

ところで、17 世紀初頭の官撰教化書『東国新続三綱行実図』の「新続忠臣図」に収録された伝資料の人物については、およそ 3 分の 1 に当たる数が近年の工具書、たとえば『韓国歴代人物伝集成』や『朝鮮人物辞書』『韓国人物大事典』といったものには採録されていない。これらはあくまでも工具書であり、その性質上、いわゆる「著名な人物」に関する記事が多いため、徳行表彰の対象だったとはいえ士大夫や武官だけでなく郷吏や任官されていない儒生、更には庶民や奴婢といった階層の人間までを記事に取り上げる『東国新続三綱行実図』とは自ずから差異がある。『海東名臣伝』や『国朝名臣言行録』といった書物の伝資料と比較する一方、これらでは取り上げられない人物または彼等のような人物が含まれる階層の伝資料については別種の文献で調査する必要がある。

「月度活動報告書」（2012 年 10 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

17 世紀前半に活動した朝鮮士大夫の一人、金堉の手によるとされる人物伝集に『己卯諸賢録』(または単に『己卯録』とする異称もある)が存在する。いわゆる四大士禍の一つ「己卯士禍」で受難した人物に関する伝記を集めたものである。中の記事は鄭光弼や趙光祖を含む「八賢」とその他の士大夫などの記事を集めた「一時名賢」とに大別され、後者は更に「流竄」「削罷」「散班」など 10 種類の項目に再分類されている。王族にあたる人物の記事は「宗族」という分類でまとめられており、ここに収められた人物は全て『海東名臣伝』にも取り上げられていた。一方で、医官や無名の老婆(山谷嫗)、皮革職人(皮匠)といった、士大夫よりも低い身分とされる人物が同書の「医師」「坊里人等」という分類でそれぞれ収録されているけれども、こうした人物の事例は『海東名臣伝』において確認できない。そこで、『己卯諸賢録』の特徴の一つとして士大夫よりも低い身分とされる、「民衆」と考えることのできる層の人物の伝記を含むことが挙げられる。

己卯士禍の「己卯」は朝鮮の中宗 14 年(西暦 1519 年)のことであるが、先日触れた『東国新続三綱行実図』を含む行実図系教化書において見られる「民衆」なる層の人物記録も中宗代の『続三綱行実図』から見ることができる。ただし、行実図系における分類名は「諸賢」「名臣」でなく「忠臣」である。ともあれ、偶然の一致に過ぎないかも知れないけれども、「諸賢」なり「忠臣」なりというカテゴリーで「民衆」層の人物事例が括られるということが、遅くとも中宗代を背景とするものには為され得たということであろう。内容だけで見れば、たとえば『三国史記』の列伝にも合節という名の奴が戦地で主人やその子の後を追って突撃・戦死するものとして描かれているけれども、あくまでも主人の記事の一登場人物としてであって合節自身に焦点を当てて記事にしたものではない。したがって、「民衆」自身が(孝子や貞女でなく)諸賢や忠臣といった範疇で扱われることも一つの特徴として認められるのではないだろうか。

最後に、以下の画像は資料調査をさせて頂いている機関のひとつ、高麗大学校漢籍室を含む大学院図書館の建物である。継続的に資料を閲覧させて頂いていることへの感謝を込め、画像とともにご紹介する次第である。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

「月度活動報告書」（2012 年 11 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

東北亜歴史財団の主催するシンポジウムが延世大学校学術情報院で開かれた。この財団は、2006 年に設立された比較的新しい財団であり、「東北アジアの歴史に対する誤解と歪曲を防ぐため」（同財団ホームページより）に設立されたという。この趣旨に対する賛否はともかく、韓国における「東北アジアの歴史」なるものへの見方は表れているであろう。なお、拝聴することになったのは、この日に御発表のあった、祥明大学校(Sangmyung University)の鄭多函(JEONG, Da-ham)先生のお誘いを受けたことによる。

鄭多函先生は韓国史学界における若手研究者であり、朝鮮時代前期史を御専攻とされている。特に、雑官や野人という観点から当時の各種知識や中華秩序のありよう、およびその認識を描きなおすことで、一国史の限界を超えようと試みておられる方である。鄭先生のこのたびの御発表は訓民正音と漢文・漢吏文・漢語との関係を考察するものであったが、他に「18・19 世紀朝鮮の中華論と中国観」(漢陽大・朴賛勝教授)や「『漢字文化圏』の同床異夢」(東京大・村田雄二郎教授)、「19 世紀中日韓三国人士の漢字筆談交流」(北京大・王昶秋教授)など、 時代・分野を問わず、テーマである「東アジア文化の中の中国」に多角的にアプローチするものであった。

一方、資料調査の面では引き続き高麗大学校漢籍室を利用させて頂いている。同機関は、もちろんその取り扱いには細心の注意が要求されるのであるが、資料によっては原典を直に見ることが可能である。さなきだに日本ではなかなか見られない文献の数々 が、マイクロフィルムや複写本でなく実物そのものを手にして見られるというのはありがたい。

続けて参加させて頂いている民族文学史研究所の読書会（古典小説班）ではナショナリズムに関する先行研究を読み、議論するといった活動が継続している。これまでベネディクト・アンダーソン『想像の共同体』(ナナム)、木村幹『韓国／朝鮮ナショナリズムと小国意識』(サンチョロム)、ホ・テヨン『朝鮮後期における中華論と歴史認識』(アカネット)、ケ・スンボム『止まった時間―朝鮮の大報壇と近代の敷居』(西江大学校出版部)などを読み進めてきたが、その積み重ねの上に年末には翌年の方針や取り組む典籍に関する話し合いが為される予定である。

また、今月末には指導教官の野崎充彦先生が御訪韓下さったので、御指導御助言を賜った。

「月度活動報告書」（2012 年 12 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

今月の調査で目にした資料に、『燃藜集』と題された 4 巻本の典籍(以下では高麗大本と略称する)がある。もともと、韓国においては高麗大学校漢籍室にのみ所在が確認される書物であったけれども、外務省の「協定テキスト」によると 2011 年 6 月に発効した日韓図書協定の目録の中には同名の書物(以下、協定本と略す)があるという(http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/treaty/pdfs/shomei_66_j.pdf)。ただ、協定本は全 17 巻であるため、内容には量に比例する情報の精度や記事の項目数自体に差があるものと思われる。 高麗大本の第 2 巻の第 1 葉には「燃藜抄」とあるので、李肯翊の『燃藜室記述』を抄約したものと推測されよう。協定本は実物をまだ見ていないため確実なことは言えないものの、程度は異なるにせよ、高麗大本同様に『燃藜室記述』の抄約である可能性が少なくない。

そもそも、李肯翊(1736~1806)による紀事本末体の私撰史書『燃藜室記述』が朝鮮野史の集大成と評される存在であることは、韓国学研究においては周知の事実である。現存するものとして筆写本が確認されるほか、韓国でもっともよく流通していると考えられるものに民族文化推進会(現、韓国古典翻訳院)から刊行された活字本がある。この解題によれば、同書は二種類の写本を底本としたとあり、一つは朝鮮図書刊行会の印本の底本となった写本全 59 巻、もう一つは崔南善主管の光文会印本の底本となった写本全 34 巻である。相違はあるにせよ、いずれもそれなりの分量であることは間違いない。朝鮮建国にあたる 14 世紀末葉から『燃藜室記述』(厳密には同「続集」)で最後となる顕宗代つまり 18 世紀初頭までの約 300 年の朝鮮国史を諳んじることは、李肯翊当時の士大夫たちであっても容易ではなかっただろう。そこで『燃藜集』のような、いわばダイジェスト本が時の知識人たちに求められたと考えられる。

なお、12 月のソウル・京畿道地域は激しい寒波に見舞われ、「どこに目をやっても白一色」という状態であった。そのため、どこを歩くにも注意を要し、自身含め往来をゆく人の歩幅がいきおい狭くなり、それでも転倒する場面に直面した。バスもスピードをかなり抑え、そのため道路が平素より渋滞していたようである。高麗大キャンパスへの移動だけでなく、平地にあるソウル市大のキャンパスを歩くときすら足を取られそうになった。零下 10 度を下回る、例年に無い寒さが続いたため、路上の雪がいつまでも溶けないためである。そんな中で繰り広げられた大統領選挙だけは、メディアを熱く賑わしていた。

「月度活動報告書」（2013 年 01 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環派遣」研究員）

高麗大学校 BK21 韓国語文学教育研究団のシンポジウムにおいて、「『東国新続三綱行実図』「新続忠臣図」に収録された壬辰倭乱以前の人物事例について」{『동국신속삼강행실도』「신속충신도」에 수록된 임진왜란 이전의 인물 사례에 대하여}という発表を行った。

BK21 とは「頭脳韓国 21(Brain Korea 21)」事業の略称で、日本の COE に相当する国家の学術支援事業である。これが 2000 年度から韓国で進められており、今年度は第 2 次 BK21 の最終年度となる。大統領の出身地域や学閥への影響が日本の総理大臣のそれとは随分異なるお国柄ということもあり、同事業の節目と大統領選挙が重なったことで 2013 年度からの影響は今なお懸念される一方、次年度に向けた韓国研究財団(日本学術振興会に相当)などの公募も始まっている。

そうした BK21 のプロジェクトの一つ、高麗大の韓国語文学教育研究団による今回のシンポジウムでは、主催である高麗大の先生方のほか、台湾・中国・日本といった東アジア地域やウクライナ・ドイツといった欧州の研究者や、欧米・中国で研鑽を積んでいる博士課程生以上の若手まで、発表者は様々である。分野も多様で、語学・文学・韓国語教育学、時代は韓国語教育学が入ったこともあって現代や近代のものが多かったものの、古典研究もあった。たとえば、芹川哲世先生(二松学舎大学文学部教授)の「解放前の朴啓周作品考」{해방 전 朴啓周 작품고}、洪性楚氏(北京大学中文系博士課程生)の「前近代韓中両国における侠盗イメージの小考」{古代韩中两国之侠盗形象小考}などである。

ところで、ソウル市立大学校内では、報告者の所属する都市科学研究院と同じく学内にあるソウル学研究所で「南京都城変遷史」という発表があり、そちらへも参加した。内容としては、翌月に現地踏査を控える調査参加者を主対象に、南京城址の史的展開を概説して予備知識を逞しくさせるといったものである。発表者のキム・ジョンソプ(김종섭/KIM, Jong-Seop)教授はソウル市大の国史学科に居られ、隋唐五代史とくに官制を専攻されているとのことであった。

また、本事業の伊地知紀子先生が御来訪下さったので、打ち合わせなどを行った。

「月次活動報告書」（2013 年 02 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

ソウル学研究所主管・ソウル特別市庁主催によるシンポジウム「第 1 回漢陽都城国際学術会議―歴史都市と都市城郭(제 1 차 한양도성 국제학술회의 – 역사도시화 도시성곽)」がソウル市庁庁舎で開かれた。開会の辞は現職の朴元淳(박원순/PARK, Won-Soon)ソウル市長によって行われている。市の行事として広く一般開放されていたため、市民向けの公開講座の側面があることも特色といえよう。

内容は、「欧州歴史都市における遺産としての都市城郭―世界遺産目録の諸事例―」(アテネ工科大学、Prof. Sofia AVGERINOU KOLONIA)、「世界遺産としてのイスタンブールの都市城郭」(イスタンブル文化大、Prof. Nur AKIN)、「世界文化遺産登録のイタリアの要塞都市―ヴェローナ・フェレッサ・サビオネータ」(フェデリコ 2 世・ナポリ大、Prof. Teresa COLLETA)、「保護しながらの利用、利用しながらの展示―南京城郭を例に―」(南京市企画設計研究院、童本勤(TONG, Benqin)副院長)、「ソウル漢陽都城の世界遺産的価値」(成均館大、イ・サンヘ(이상해/YI, Sang-Hae)教授)といったように、前近代の史跡を有する大都市が如何にそれを保存・活用するかという点に焦点の置かれたものであった。

ちなみに、イ・サンヘ教授は建築学とくに建築史を御専攻とされている。ソウル大を卒業後、建築デザイン会社勤務や大学講師を経て米国コーネル大で学位を取得された(学位論文：“Feng-shui: its context and meaning”, 1986)。著書に『宮闕・儒教建築』(単著。図書出版ソル、2004 年)、『河回マウル』(共著。図書出版ソル)、「世界文化遺産と朝鮮王陵―その歴史と向後の仮題」(『韓国大学博物館協会学術大会発表論文集』、2009 年)、訳書に『中国古典建築の原理』(シゴン社、2000 年。原著は李允鉌『華夏意匠―中国古典建築設計原理分析』)など。また、このシンポジウムを後援した ICOMOS(国際記念物遺跡会議)韓国委員会の委員長として在任中である。

画像は会場となった新庁舎(後方)と、その手前の旧庁舎。積雪が見られるように、当日はあいにくの大雪であった。

「月度活動報告書」（2013 年 03 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

韓国で 3 月といえば新学年の始まりであり、滞在も 2 年目を迎えた。しかし、むしろ昨年以上に緊張を禁じえないというのが正直なところである。そうした節目に、指導教官である野崎充彦教授がソウルに御訪問下さり、直接御指導を賜ることができた。

さて今月は、資料調査で高麗大学校漢籍室と同様にお世話になっているソウル大学校奎章閣韓国学研究院（以下、奎章閣と略称する）を紹介しつつ、資料の保存と調査の意義についても触れることにしたい。

閲覧させて頂いた資料の一つ、金時讓(1581-1643)の『紫海筆談』はマイクロフィルム（以下、MF と略す）を用いた。撰者で言えば、韓国でいう壬辰丁酉倭乱(1592-1598、日本でいう文禄慶長の役。日朝明三国の戦争として「壬辰戦争」という共通呼称を提唱する動きもある)を青年として直に経験した人物である。また、様式面で言えば人物関連の奇談や異事を集めたもの、とされている。『大東野乗』や『寒皐観外史』への収録本とは別に単巻としても現存しており、それを所蔵する大学機関がここ、奎章閣であった。

奎章閣は韓国屈指の韓国学研究機関であり、古典籍の蔵書数も一二を争う多さを誇る。その名の由来を、『五倫行実図』の編纂を下命した王でもある正祖によって昌徳宮に建てられ、いわゆる日韓併合後に設立された京城帝国大学の管理下となった、奎章閣に持つことは周知のとおりであり、公式サイトの沿革に詳しい。資料のほとんどが MF または複写本でのみ閲覧等が許可される点は残念であるものの、その貴重さを考えればやむを得ないとも言える。MF は膨大な量の資料の保管や閲覧希望への対応などを充足させるには適している一方、ビネガーシンドロームなどの短所を考えれば、IT 化は避けられないだろう。実際に古典研究の分野でも日本に比べ古典籍のデータベース化・画像化に尽力している。しかし IT 化にも例えばソフトウェアのアップデートや新開発に伴うデータ形式の選択の問題などが想起され、画像は詰まる所データであるので高度な技術が簡単に使えるようになればハッカーなどによる破壊や改竄の危険性も高まってくる。何より、原資料自体の量の膨大さからまだまだ IT 化が追いついておらず、中には未刊行のものも多いのが現状である。新資料が発見される可能性も十分にあろう。したがって、資料の IT 化は進んでいくとしても、今回の派遣のような資料の現地調査という営為の意義は強まりこそすれ薄まることはないものと考えられる。

なお、末筆ながら、奎章閣のスタッフの方々には手際良いサポートを頂いており、この場を借りて感謝申し上げる。今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

奎章閣外観

「月度活動報告書」（2013 年 04 月度）

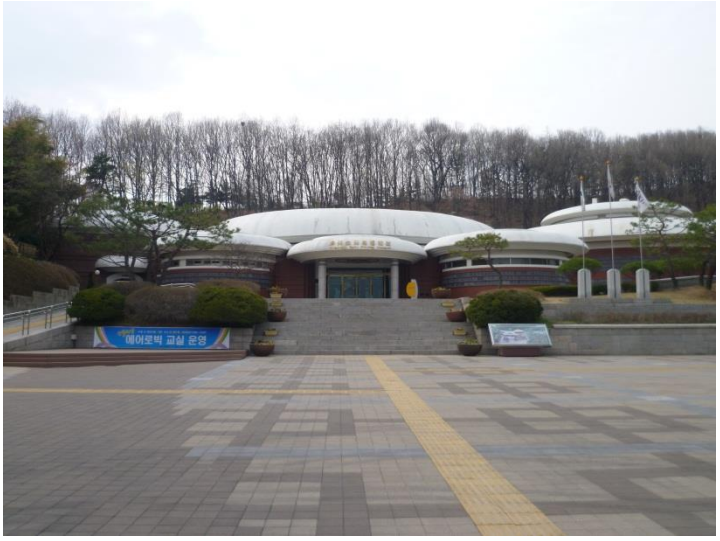
金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

朝鮮半島の文化において書籍が重要な位置を占めていたことは、例えば士族層による私蔵書の保管が孝行の一つとして実践されていたという指摘があることからも窺うことができる。また、現代においてもその世界的認証について韓国は早くから強い関心を持っていたと見られ、ユネスコの「世界の記憶(Memory of the World)」にも制度設立初期から出版物の登録申請に努めてきた。その結果、現在まで 7 種類が登録されている。その中のひとつ、『白雲和尚抄録仏祖直指心体要節』（以下、『直指』と略称する）の冒頭 2 字「直指(직지/jikji)を採って名付けられ、後述の興徳寺跡を含む敷地に建てられた博物館が、忠清北道清州市にある清州古印刷博物館「JIKJI」である。

『直指』は現存する韓本で最古の金属活字本とする説のある一書として知られる。フランスのモーリス・クーラン(1865-1935)の著した『韓国書誌』（韓国語訳本あり）や李鍾賛[2005]「直指心体要節과 高麗活字에 관한 研究」（『出版文化研究』13-1、出版文化学会、韓国)によると、現存の金属活字本とされるものは清州の興徳寺で鋳造された活字を用いて印刷されたものだという。

ここで展示されている『直指』は複製本であったけれども、『五倫行実図』の製作・修正や版木のレプリカを実見できたのは幸いであった。『五倫行実図』と『東国新続三綱行実図』（以下、『東国新続』）とは展開系統を異にするものの、様式については漢文本文と諺解文の配置が同様であるために版木製作や印刷の面では共通性が見られ、その意味で刊行過程の労力を考える上で参考になり得るからである。

また、同日に行われた書誌学会（学会誌は『書誌学研究』）と韓国書誌学会（学会誌は『書誌学報』）との共同学会へも参席してきた。現在、韓国では BK21 事業が終り大統領も代替わりしたことを契機に学会の統廃合が起こっているそうである。今回の共同行事もその一例で、統合後の名称は韓国書誌学会、学会誌は『書誌学研究』とされた。発表は「韓国金属活字始原の源泉技術および興徳寺字の鋳造法に関する研究」（김성수/KIM, SeongSoo 清州大学校)、「16 世紀寺刹版仏書刊行の増大とその書誌史的意義」(손성필/SON, SeongPil 韓国古典翻訳院)など。とくに後者の発表では朝鮮国開国から 17 世紀末までの 300 年強にわたる寺刹版仏書の刊行数推移が挙げられており、倭乱後における『東国新続』刊行当時の出版動向を見る上で示唆を受けるところがあった。当時は物資がおそらく全体的に不足した状況であろう中、官撰書・個人の撰著・寺刹本といった出版形態で多種の書籍が作られたことになる。復興期に書物へ向けた朝鮮の人々の期待を窺い知るための手がかりとなりえよう。



清州古印刷博物館「JIKJI」

「月度活動報告書」（2013 年 05 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

趙憲（JOH, Heon/조헌、1544/中宗 39~1592/宣祖 25）は『東国新続三綱行実図』の忠臣事例として収められた人物の一人であり、宣祖末期に宣武原従功臣として叙されてもいる。ただ、それ以上に、文禄慶長の役または壬辰丁酉倭乱において活躍した義兵将の一人であることのほうがより知られているであろう。このような側面を持つ趙憲にはもう一つの側面が存在する。それは、文廟に祭られている我国十八賢としてのそれであり、釈奠という祭事で毎年奉祀されている。そこで、壬辰倭乱期に顕彰された「忠臣」の後日の展開を見る一環として、釈奠の行われる成均館大成殿（成均館大学校敷地内）に足を運んだ。

釈奠は、文廟に祀られた孔子およびその従享者（後述）を奉ずるために行われる祭祀儀礼であり、宗廟祭祀とともに再現行事が行われている国家儀礼の一つでもある。韓国の国家主要無形文化財に指定されており、成均館によれば「中国でも既にその原型を失い、その原型を唯一完璧に保っている」ものであるらしい。年に 2 回行われ、本来は陰暦の 2 月と 8 月の上丁日に行われるとされるけれども、2007 年から陽暦の 5 月 11 日と 9 月 28 日に変更された。大まかな流れとして、神位に御霊を呼び寄せる迎神礼に始まり、幣帛を捧げる奠弊、爵（さかずき）を捧げる初献・亜献・終献を経て供物を片付け祝文や幣帛を燃やす撤辺豆・望瘞礼に至って約 2 時間の儀式が終る。

祀られている人物を列挙すると、孔子、四聖（顔回・曾参・孔伋・孟軻）、十哲（いわゆる孔門十哲とほぼ同じだが四聖として奉じられている顔淵に代わり『史記』「仲尼弟子列伝」で 11 番目に挙がる子張こと顓孫師が含まれる）、宋朝六賢（周惇頤・程顥・程頤・邵雍・張載・朱熹）という 21 人の中国の人物と、我国十八賢（薛聰・崔致遠・安裕・鄭夢周・金宏弼・鄭汝昌・趙光祖・李彦迪・李滉・金麟厚・李珥・成渾・金長生・趙憲・金集・宋時烈・宋浚吉・朴世采）と総称される 18 人の朝鮮士大夫である。現在見られる人選は比較的新しい時代のものであり、中国の人物は 18 世紀初頭、朝鮮の人物は 19 世紀末葉に定まったものだという。趙憲も 19 世紀末葉に当たる 1883 年に従祀されることとなった。同じく従祀対象とするよう上疏されていた後金のち清との主戦論者、金尚憲が認められなかったのとは対照的である。

趙憲の文廟従祀に関する請願自体は既に 18 世紀中葉の英祖代から見られたものの、実現は 100 年以上後となった。1883 年は高宗 20 年に当たる。高宗親政開始から 10 年経っており、この間には 1875 年の江華島事件や翌年の日朝修好条規締結を始め、その後の欧米列強との条約締結、紳士遊覧団の派遣と彼らのもたらした外来文物、更に日本の要請を契機に導入された西洋式朝鮮軍「別技軍」の創設、それを契機として倭乱後に設立されて以来存続する旧来の五軍営が起こした「壬午軍乱」といったように、開国に伴う変化と動揺が続発していた。倭乱期の義兵将・忠臣としての評価が為されて久しい趙憲に対し 1883 年という時期に改めて文廟への従祀が求められ、それを高宗が認めたという事実は、朝鮮王朝末期の国内情勢や日本に対する認識を考える上で一つの好例となりえよう。

「月度活動報告書」（2013 年 06 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

『燃藜室記述』には「二陵之変」という章立てがある。文禄慶長の役または壬辰丁酉倭乱の際に起こった王陵荒らしを言う。二陵とは文字どおり二つの王陵を意味し、具体的には朝鮮第 9 代国王の成宗(在位 1469-1494)が眠る宣陵と第 11 代国王の中宗(在位 1506-1544)のために作られた靖陵の二つを指す。これらは他の韓国内の王陵とともに 2009 年にユネスコの世界文化遺産に登録されている（ただし現在の北朝鮮領内に存在するものや燕山君墓・光海君墓などは含まれない）。現在はもちろん整備されているものの、同戦争に関連する故地であることは事実である。そこで、地形や大きさなど実見、また歩く等して体験知として二陵を確認するため、実地調査として足を運んだ。

まず、ユネスコで公開されているノミネーションなどを典拠に宣靖陵を簡介すると以下のとおり。王陵区域本体の面積は 24ha（ヘクタール）、バッファゾーン（王陵等史跡を保護するために設定される緩衝区域）を含めると総面積は 44.7ha であり、総面積で見れば登録されている王陵としては最小規模である。いずれも現在のソウル市江南区三成洞（道路名住所：宣陵路）にあり、文化財庁が一括管理できるほど互いの距離は近い。

続いて、埋葬されている両王について言えば、両王は父子関係にあり、中宗は成宗の次男にあたる。異母兄は暴君として知られる第 10 代国王、燕山君(在位 1494-1506)。成宗は世宗の命で編纂された『三綱行実図』の初刊三冊本から記事を抜粋して 3 分の 1 程度の分量に再編・刊行させている。朝鮮王朝時代を通じて何度も重刊され、『三綱行実図』と言えばこれを指すようになるほど普及した。中宗はその『三綱行実図』の続刊である『続三綱行実図』と、いわゆる三綱五倫のうちの「兄弟有序」「朋友有信」つまり序と信の人物事例を集めた『二倫行実図』を刊行した王である。また、成宗は『経国大典』編纂の事業を完了させ、中宗は『朱子増損呂氏郷約』を頒布した実績をそれぞれ持っている。こうした両王の陵が、それまで貶めていた倭によって荒らされた事件こそ「二陵の変」であった。

この二陵、宣陵と靖陵（及び、厳密に言えば宣陵と同原異岡の位置関係にある成宗の継妃、貞顕王后尹氏の陵を含めた三陵）を案内図どおりに見て回ったところ、2 時間程度かかった。また、敷地内に起伏は存在するものの、高台に登ったところで全体を一望するには敷地内の木々が妨げになった。逆に、発見の手掛かりになるものは陵の前に建てられた丁字閣や紅門くらいであり、これらの存在が発見を早めた可能性はある。もし現在のように木々が生い茂っていたとすれば、王陵の存在を知らない人間が探索を試みても相応の時間がかかるだろうが探して探せなくはない広さとも思われた。戦争でタガの外れた兵士が多くのものを荒らし侵奪するというのは一般論として有り得るものの、当時、景福宮など王の住む宮殿すら放火の対象にできた民情からすれば、生死の違いがあるとは言え同じく王の安置された陵に対する心象も窺える。盗掘者の正体がどうあれ、宮殿・王陵という国王の象徴的「居所」が破壊されたという事実は、その後の官撰書や知識人の著述内容の傾向に影響を及ぼしたことであろう。

「月度活動報告書」（2013 年 07 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

ソウル郊外に京畿道高陽市というところがある。ソウルのおよそ北西であり『新増東国輿地勝覧』の「京畿道」にも北西よりはやや西方よりに描かれているが、現代の我々には市名よりも金浦空港よりも少しソウルよりのベッドタウンと言う方が分かりやすいかも知れない。今月の踏査は、その高陽市の一角にある幸州山城で行った。というのは、この幸州山城は壬辰丁酉倭乱／文禄慶長の役において朝鮮が勝った陸戦の地としてよく挙げられる古戦場であり、しかもここを戦場とした「幸州山城の戦い」で指揮を取った、宣武一等功臣でもある権慄(KWON, Yul/권율, 1537/中宗 32~1599/宣祖 32)を顕彰しているためである。

文化財庁 HP などのデータを参照すると幸州山城の地理的条件は以下のとおり。正式名称は高陽幸州山城（ただし 2011 年 7 月 28 日以前は幸州山城）、面積 347,670 ㎡、東西におよそ 1km 程度伸びた形状をしている。また、建築方式においては山頂式山城に分類され、海抜はこの山城のある徳陽山の高度により海抜 125m と判断される。実際に歩いてみたところ、木々が鬱蒼と生い茂る上、道が舗装されている現在でも歩きにくい急勾配の坂が所々存在するため、要害堅固の地といって良い。この幸州山城にちなんだ、丈の短いエプロンのような女性の衣服に「幸州チマ(HaengJoo Chima/행주치마)」というのがあり、これを利用して多くの石を山上まで運んで投石に用いたという話が良く知られている。実際に登りながら石を運ぶ労力は相応にかかるものの、攻め来る日本軍を高地からの投石という、特別な訓練経験を要しない方法で迎撃できる効果を思えば、その労力は十分に報われたと言って良い。

このように身分・性別を問わない、いわば混成軍を指揮して勝利を収めたとされる権慄について、後代の李肯翊(1736(英祖 12~1806/純祖 06)の『燃藜室記述』だけでなく同時代の柳成龍(1542/中宗 37~1607/宣祖 40)の『懲毖録』でも上述の内容に準ずる姿が描かれている。一方、光海君の命によって編纂された民衆教化書『東国新続三綱行実図』（以下、『東新』と略す）で権慄を忠臣とした記事は無く、わずかに辺応井の記事において名の記述が見られるに止まる。ただ、幸州山城の戦いから 8 ヶ月程度前の忠清道錦山の戦いで辺応井の軍とともに日本軍を挟み撃ちする約束をしていた権慄の軍が一向に現れず、辺応井によって「交わした約を失し、義士をみな死なせてしまおうとする」人物と見做されるという内容であり、顕彰されている権慄像との乖離は大きい。

翻って両書の編著者の党派を鑑みると、柳成龍が南人であるのに対し、『東新』編者で都提調の鄭仁弘(1535/中宗 30~1623/仁祖 01)や同じく提調の李爾瞻(1560/明宗 15~1623/仁祖 01)は北人から更に分派した大北である。ところで権慄は 1597 年旧暦 9 月の忠清道稷山の戦いで柳成龍と共闘した関係がある（洪良浩『海東名将伝』）ことから、権慄と柳成龍そして柳を介した鄭仁弘や李爾瞻などの『東新』編者たちとの関係や、権慄の評価をめぐる南人と大北の対立を窺うことができる。仁祖反正による光海君の廃位とそれに伴う大北派の粛清が、後代の権慄評価やその人物像の方向性に影響を及ぼしたと考えられよう。

「月度活動報告書」（2013 年 08 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

『燃藜室記述』に引用されている野史の一つに、『懲毖録』がある。壬辰丁酉倭乱／文禄慶長の役（以下では中立性の確保のため、同戦争と称する）に関する記録で、天下統一を果たした豊臣秀吉が朝鮮国へ使臣を送った 1586/宣祖 19 年からその記述が始められている。日本にも流入しており、訓点の付されたものが京都の書肆から刊行されて読まれていたことは、現存する和刻本の存在によって知ることができる。日本では東京大学駒場キャンパスの駒場図書館と同じく東京大学の本郷キャンパスにある史料編纂所図書室で所蔵されている。また、川口長孺『征韓偉略』や伊藤威山『鄰交徵書』といった 19 世紀前半の日本で刊行された同戦争を記す書物にも引用されているという（崔官・金時徳[2010]『壬辰倭乱関連日本文献解題（近世篇）』、図書出版昆(Moon)）

著者は柳成龍(1542/中宗 37~1607/宣祖 40)。字は而見、西厓と号す。豊山柳氏。退渓・李滉の門弟である。1566/明宗 21 年に文科登第してはいるものの、翌年は明宗の逝去および宣祖の即位年に当たる。壬辰丁酉倭乱／文禄慶長の役の終わった 1598 年/宣祖 31 年に北人からの弾劾を受けて罷免されて安東河回(河回マウルという観光地として現在有名である)に隠棲するも1604/宣祖37年には扈聖功臣二等に叙勲され、宣祖没年・光海君即位の前年である 1607/宣祖 40 年に死去した。

このように、官途に就いて以降その死までのほとんどを宣祖一代の臣として生きた柳成龍の叙勲は、とある行動によるものであった。扈聖功臣というのは、同戦争において宣祖が避難のため王都漢城を離れた際、平安道義州に付き従った臣下に対し下賜された称号である。三つに等級分けされ、一等は李恒福と鄭崑寿の 2 名、二等は柳成龍を含む 31 名、三等は鄭琢など 53 名、合計 86 名に授与された。つまり、「苦難（この場合は同戦争）にあっても王に付き従う」という行為が褒賞の対象となったわけである。便宜上、この行為を以下では叙勲の称号から取って「扈聖」と指称する。ところで『東国新続三綱行実図』（以下、『東新』）には王や上官・主人を庇ったり或いは共に死ぬ事例、主人の側から離れず精勤する奴婢の事例などが見られるものの、「扈聖」行為の事例が一つも載せられておらず、したがって柳成龍自身も忠臣として取り上げられていない。

翻って『燃藜室記述』に目を転じると、百官がみな逃げ出して 100 人程しか扈従しなかったことのほかに、御医の楊礼寿(??/未詳~1597/宣祖 30 年)が足の不調を偽って辞退を図った記事や、宣祖が都落ちする際に漢城の民衆から石を投げられる記事などが載せられている。これらに見られるように、国王の権威は目に見えて凋落していた。忠臣は国難に多く現れるという趣旨の記述が『芝峰類説』に見られるが、一方でこのような事態に直面したために、忠臣の顕彰やそれを用いた教化は同戦争直後の朝鮮の為政者たちにとって急務とされたであろう。

したがって、直近の時代の王を描くこと自体を忌避していた可能性も無視できないものの、国や王への忠を教化する媒体である忠臣図を含む『東新』から外されながら、勲功として褒賞されることとなったのが「扈聖」行為だったといえよう。

「月度活動報告書」（2013 年 09 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

壬辰丁酉倭乱／文禄慶長の役（以下、同戦争）や『東国新続三綱行実図』、また 17 世紀初頭の朝鮮社会について研究を行う場合、第 15 代国王の光海君が重要な位置を占める存在であることは言を俟たない。近年、『東国新続三綱行実図』の研究もそのアプローチの一つと言えようが、光海君やその時代が関心を集めている。その名を冠した単著として韓明基[2000]『광해군―탁월한 외교정책을 펼친 군주(光海君―卓越した外交政策を展開した君主)』（歴史批評社）と呉恒寧[2012]『광해군―그 위험한 거울(光海君―その危険な鑑)』（ノモブックス）も刊行された。

光海君、名は琿。生没年は 1575/宣祖 8 年~1641/仁祖 19 年、うち 1608 年から 1623 年の 15 年にわたって在位した後、いわゆる仁祖反正によって廃位された。よって王号は無い。明と後金との間で展開した中立外交の実績が評価される一方、暴君としての悪評も高い。暴君評の原因としては、兄弟（同母兄の臨海君と異母弟の永昌大君）殺し・継母幽閉・中立外交の一面である明への非事大・王宮再建事業等が挙げられる。

王号の無い光海君は陵も無く、王子君の様式に則って葬られたという。そこで、今月の現地調査は、墓所のある京畿道南揚州市へ行くことにした。添付の画像は踏査地で撮影した、光海君の墓石である。なお、以前、宣陵の調査報告で触れたように、光海君墓は世界遺産に含まれない。

京畿道南揚州市はソウル北東部の一部が若干接するに留まるものの、南揚州郡当時にその一部であった現在の九里市を含めればソウル市域東境の概ね半分と隣り合う。そのため、九里市とともにソウルのベッドタウンとして住民を増やしており、同市ホームページによれば2013年9月現在での人口は61万人以上、大阪で言えば堺市の 7 割強、東大阪市よりやや多い程度である。面積は約 450km² であるから、おおよそ大阪市から堺市を経て河内長野市までの大きさを想像すれば分かりやすいだろうか。光海君墓はそのような南揚州市の概ね中央部、ソウルの景福宮から見れば東北東に位置している。

実際に足を運んでみたところ、最寄駅である金谷駅から墓所のある地域へ行くバスはあるものの、駅周辺を抜けると途端に山中さながらの景色に変わり、道路は大型車 1 台通るのが精一杯、バス停も無くなった。下車時は目的地近くで停車ボタンを押して止めてもらい、降りるのである。乗車時も同じく、コース内で立って待つなり歩きながら待つなりし、バスが来れば挙手して止めて、乗る。そんな牧歌的な地域のひっそりとした山の中に光海君の墓がある。

光海君の墓は、その向かって右に廃妃である文城郡夫人柳氏の墓が配置されるよう並んでいた。称号に従い、ただ「君」の礼式で葬られたとされるその墓所は、王陵としては最小規模の宣陵すら比較にならず、英雄とされる李舜臣の墓所と比べても小さく簡素である。人目に触れないよう隠されているかと思える立地であり、文人石等が無ければ一般の墓と見紛う規模であり、さながら光海君への評価を物理的に暗示しているようでもあった。現代でこそ再評価されつつあるものの、叔父である世祖に退位させられた魯山君が 1698 年に端宗として復位されたのと違い、光海君の王位が結局は回復しなかったのも事実である。仁祖反正を主導した西人をはじめとする非大北派が政権を握り続けた時勢も影響していようが、光海君像を示唆する一つの事象として、これもまた看過してはならないであろう。

光海君墓

「月度活動報告書」（2013 年 10 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

『東国新続三綱行実図』（以下、『東新』と略称する）で取り上げられた人物の一人に郭趨という者がいる。壬辰丁酉倭乱／文禄慶長の役（以下、同戦争）で敵勢を防ぎきれないまでも任地の黄石山城を守って留まり続け、死んだ安陰県官である（『東新』09「新続忠臣図」、85a-b／「郭門忠孝」）。郭趨の忠行動は『東新』にもあるとおり、光海君によって旌門されている。その地が大邱広域市（以下、テグ）にあるとのことなので、実際に足を運んでみた。

郭趨を表彰する門閭は、「玄風郭氏十二旌閭閣」と、現在呼ばれている。テグ自体は、2011 年に世界陸上大会が開催された場所でもあるので或る程度知られているけれども、ソウルに次ぐ地方大都市である 6 つの広域市のうち、釜山には及ばないながら仁川と同程度の人が住まう（人口等は後述。残る広域市は光州・大田・蔚山）。今回の踏査地は市区から直線距離で約 16km、実際の移動時間から見ればバスでおよそ 1.5 時間程度隔てた達城郡玄風面という地域にある。達城郡は人口約 19 万人・面積が 426.61km²、面積はテグ全体(883.63km²)のおよそ半分を占めるものの全人口約 253 万人の 1 割に満たない。ちなみに、上で触れた黄石山城のある慶尚南道咸陽郡と達城郡は直線距離で 70km 以上離れており、同じ慶尚道にあるとは言え近いとも見做し難い。（テグの人口等は公式ホームページから『2013 年市情現況』をダウンロード、参照。http://www.daegu.go.kr/Plan/fileupload/2013 시정현황(6.26).pdf ）。

郭趨の一族はここ、達城郡玄風面を本貫とする。始祖は現在の中国河南省からの帰化人、郭鏡とされ、同戦争以前には清白吏とされた郭安邦を輩出している家門がこの玄風郭氏である。その一人、郭趨を始めとする 12 人の徳行を表彰しているのが「玄風郭氏十二旌閭閣」であった。なお、義兵将としてより有名な郭再祐も同じく玄風郭氏であるが、含まれない。郭再祐の父、郭越とは互いの名に含まれる「走」字が示すように同世代であり、郭承華を曾祖父または高祖父とする血縁関係である。この旌閭閣は仕切りによって 12 の空間を中に有しており、向かって右から順に、①忠臣：郭趨 ②孝子：郭履常・履厚兄弟、③烈婦：履常妻居昌慎氏、④烈婦：柳文虎妻郭氏、⑤孝子：郭潔・浩・清（・洞）兄弟、⑥孝子：郭宜昌・愈昌、⑦節婦：郭再祺妻広陵李氏、⑧烈婦：郭弘垣妻密城朴氏、⑨烈婦：郭寿亨妻安東権氏、⑩烈婦：郭乃鎔妻全義李氏、の徳行を称える懸板が掛けられており、比較的大きな字で事績等が記されているので徳行のあらましを知ることができる。残る二つにはそれぞれ「朝鮮国孝子處子郭公之碑」「孝子處子苞山郭公之碑」と彫られた石碑が立てられていたけれども、格子に遮られて中に入れないため、側面に書いている碑文を僅かしか実見できなかった。なお、⑤の懸板には洞の名が欠落しており、その理由が併記されている。

表彰されている人物のうち、同戦争に関連するのは①②③④⑤⑦である。郭越をはじめその子女である②履常（『東新』では履祥）・履厚と④郭氏、③履常妻と、郭再祐と血縁的により近い⑤その従兄弟、郭再勲の子である郭潔・浩・清（・泂）、及び⑦その異母弟、郭再祺妻の広陵李氏に分けることができる。そして郭越一家は「一門三綱」 とされて『東新』に全員が載せられ、この旌閭閣の冒頭を飾った。

同じ玄風郭氏でありながら、同じ戦争を、かたや紅衣将軍と言われ義兵将として活躍するも戦後、化仙したとも描かれる郭再祐、かたや戦に死んで徳行者として描かれ、旌閭閣で現実世界に表された「一門三綱」の家長、郭越 この差の一因には同戦争後の郭再祐の不遇や「玄風郭氏十二旌閭閣」『東新』といった儒教教化のいわば装置の存否がその形成に加担していると考えられよう。

玄風郭氏十二旌閭閣

「月度活動報告書」（2013 年 11 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

壬辰戦争（日本：文禄慶長の役／韓国：壬辰丁酉倭乱）やその後の光海君代の研究で取り上げられる主題の一つに「交河遷都論」がある。これは、同戦争で漢城（現在のソウルの概ね中心部。そもそも漢城自体、開城から遷都されて首都となった。経緯については野崎充彦[1994]『韓国の風水師たち』pp22-23 に概説あり）が壊滅状態になったことから、旺気の衰えを理由にした術官、李懿信の勧めで王都を漢城から交河へ遷都しようとしたために生じた議論である。なお、李懿信やこの議論については金枓圭[2000]『조선 풍수학인의 생애와 논쟁』（『朝鮮風水学人の生涯と論争』、窮理）、pp273-296 でも紹介されている。

結局、この遷都は実現しなかったものの、試みようとした原因として、光海君が風水地理説に傾倒したことを主とする説（李丙燾[1972]「光海朝의 遷都論과 京内 両闕創建에 대하여」、『震旦学報』33。李章熙[2005]「光海君과 交河遷都論」、『鄕土서울』65）と、それ自体は一要因として否定しないものの王権強化のための一手段とする説（노대환/NOH, DaeHwan[2012]「光海君代의 宮闕経営과 風水地理説」、『朝鮮時代史学報』63。이필원/YI, PilWon[2009]「光海君의 王権強化策과 그 限界」、『歴史와 歴史教育』17）が見られる。強度の差が見られるとは言え、いずれも風水が関連し、遷都自体は実現しなかったものの術士によって交河が選ばれたのは事実である。そこで、朝鮮都市研究は勿論、朝鮮の風水地理や王権を考える上でも重要なトピックの一つと言えるこの遷都論で取り上げられた交河の地へ足を運んだ。

交河は、『東国輿地勝覧』によれば元々は交河県として個別の地域と見做されていたけれども、現在はソウルをとりまく京畿道の一部である坡州市の一画となっている。その中で交河地区として産業地域の一つとして数え上げられており、ここは印刷・出版に関する企業が集まっている。坡州出版団地として知られ、ホームページもある（http://www.pajubookcity.org/）。坡州市ホームページによれば交河地区の人口は 32.4 万人と決して多くはない。しかし、ソウルから見れば通勤圏であり、出版団地の勤務者を念頭に置けば、交流人口としては相応に多くなるものと推測している。

現地で実際に踏査したところ、かなり平坦で起伏が少なく、また江原道のような空気や温度であった。行政区画上こそ京畿道に含まれているものの、坡州市の北部は軍事境界線を隔てて北朝鮮と接する韓国北端地域の一つであって緯度も江原道に近いため、当然といえる。その平坦な一帯にある尋鶴山（標高 194m）も高いわけではない。少なくとも技術的な問題が解決できれば産業団地を立てられる程度の広い土地が十分に得られる広さが備わっているといえる。ただ、漢江が程近い南部から西部に掛けて取り巻くように流れているために、治水という点では問題も見られる（漢江の岸辺に出版団地があると考えて良い）。技術的には可能かも知れないけれども、景福宮の真横をかすめる様に漢江が流れる構図は防御や洪水等の危険に対して不安を感じさせなくもない。

同じ不安があったのか、この議論は結局、北からの侵攻に対し背水の陣を張らざるを得ない地の利の悪さ等を主張した儒官の元老、李恒福の箚子文などによって頓挫した（林在完[2005]「交河遷都説의 対한 李恒福의 箚子文 研究」、『書誌学報』29）。ただ一方で、そんな士大夫たち自身の間で風水説が流行していたという指摘もあり（노대환/NOH, DaeHwan[2012]）、二律背反した彼らの姿が垣間見える。議論に負けたとはいえ、交河遷都論は、王都を題材に同戦争直後の朝鮮社会における地官や風水説の存在感、そして君臣関係のありようの一端を示すものと言えよう。

交河遠景

「月度活動報告書」（2013 年 12 月度）

金子　祐樹（「頭脳循環」研究員）

今月の現地踏査では錦山郡を主としつつその近くにある大田特別市にも足を運んだ。同地は壬辰戦争（日本：文禄慶長の役／韓国：壬辰丁酉倭乱）期に発生した大小多くの戦闘の一つ、錦山の戦い（取材地に近いのは第 2 次。1592 年陰暦 8 月）が起こった場所である。現在は忠清南道の市の一つに含まれている。

錦山を含む忠清南道は、ソウルから京畿道を越えて南方に広がる行政区域であり、その東方に忠清北道がある（南北といっても実際の位置関係は東西）。大田はソウル南方やや東寄り、忠清南北道に囲まれるように位置する。錦山は大田の南東である。参考に、大田の人口は約 153 万人、大阪市のおよそ 5 分の 3 程度が在住。錦山郡は 5.5 万人で大阪府高石市より若干少ないが、高石市の面積が約 11.4km^2 なのに対し錦山郡が約 577km^2 なので町を行く人の往来の違いを推し測れよう。

錦山へはバスで、ソウルから 2 時間 40 分、大田から 30 分程度かかる。特産品としては高麗人参が有名で、これを材料に作った酒（錦山人参白酒）やテーマにした催し（錦山人参フェスティバル）があると聞く。そうであれば、気候も高麗人参の栽培条件である暑からず、寒からず、水捌けよく乾燥していない地域ということになる。現在、日本では長野県などで栽培されており、このことは錦山の気候を伝えるのに役立とう。現在、ここには七百義塚という史跡がある。錦山の戦いで戦死した趙憲やその配下であった義兵たちが祀られているのだが、ここが同時に実際の戦地だったことに由来する。

趙憲については以前(2013 年 5 月度)に報告したことがあるので詳細はそちらに委ねたい。七百義塚は、北西にそびえる錦城山(標高 439m)の麓と呼べる場所にあり、敷地面積は約 7.5 万平米。名称の由来どおり、700 人の義兵を祀る塚である。李肯翊の『燃藜室記述』にはこの塚に関する記述が引用されており、それによると、趙憲の門人らによってこの塚が作られた当時の名は七百義士塚であり、その側には一軍殉義碑という石碑も立てられたという。現在は塚の横に復元物が置かれており、もとの石碑は同じ敷地内に別置されている。なお、この石碑については石工の李春福が代金・工賃を一切取らずに趙憲の門人、金簫へ無償で贈ったという話があり、金堉はこれを以て李春福を義士とした（『海東名臣伝』巻 7、「趙憲」）。

七百義塚を含め、そこまでの道を実際に歩き、また大田からバスで移動して驚きを禁じえなかったのは、その地形の平坦さである。全く起伏が無いとまでは言えないにせよ、急な勾配に疲弊させられることもないであろう。地形上、そもそも忠清道にはその南北道にまたがる湖西平野（礼唐平野・論山平野などを含む）が広がっているが、大田都心部を抜けると一面が農地で、さながら大きなグラウンドを移動しているかのようでもあり、ハンバッ（한밭、「大きな畑」の意味）という古名を今なお髣髴とさせる。また、塚付

近の丘陵地はやや急な勾配で、天候が良かったにも拘らず豊富な水分を含んだ土の柔らかさも手伝って、しばしば足をとられた。

趙憲らが戦ったとき、錦山は倭軍の拠点となっていた。結局この戦いは立花宗茂と安国寺恵瓊の率いる軍（中野等[2008]『文禄・慶長の役』によれば朝鮮上陸当時 2500 人）に敗れたのであるが、戦闘経験に加え戦術上貴重な山地を奪われて地勢的にも不利であったから、700 人では敗北もやむを得なかった。しかし、それが工匠を動かしたという現象は、当時の庶民層にとっての国なるものを考える一つの手掛かりとなりえよう。

七百義